
国民国家による「少数民族」の創出過程

——タイにおける山地民博物館の展示から——

Representation of State and Ethnic Minority in the Hilltribe Museums of Northern Thailand

ISHII KAYOKO

石井香世子

This paper will examine the relation between the State of Thailand and ethnic minorities by analyzing how the concept of “Hilltribes” has been invented during the last fifty years in the Hilltribes museums of Northern Thailand. For the last fifty years, the government of Thailand has conducted a welfare policy for Hilltribes. While many have pointed out that the concept of “Hilltribes” was invented by Thai officials during this period, none actually managed to explain how this has been done. This study finds that the Hilltribe Museums of Northern Thailand, in their use of techniques of representation, produce a particular image of those ethnic groups labeled “Hilltribes” that clearly distinguishes them from the Thai.

はじめに

「山地民」という語とその定義¹は、1959年に登場した²ものであり、タイ政府系機関によれば「山地民とはタイの北部および南西部の遠隔山岳地帯に住むエスニック・マイノリティー」とされている（Tribal Research Institute 1991：1；Tribal Research Institute 1995：1）。今日、この「山地民」という語は、主に政府によって定義される行政区分、政治集団・利害集団としての「山地民」、観光資源である少数民族文化の保持者としての概念集団、そして「山地民」を意識しない村単位・民族単位のつながりという4つの概念を表している。

タイの内務省統計局は、「山地民」の人口を187,116人（1997年）と発表しており³、モン人、ヤオ人、ラフ人、カレン人、リス人、アカ人、ルア人、カム人、ティン人の9つの民族に分類している⁴。またタイ政府によれば、「山地民」の人々は、タイ北部から東部にかけての20県にまたがる山岳地帯に住み、近年の政策によって平野部へ移住する人々も増えている（Tribal Research Institute 1995：1）。しかし、「山地民」として行政上区分される人も、チェンマイ、バンコクといった都市部で賃労働者として働く人が増えており（Kunstadter and Kunstadter 1983：363；Toyota 1998：1-2）、台湾、イスラエルなど外国へ出稼ぎに行く人もあって、今日では山岳地帯や遠隔地に住むとは限らない。「山地民」の産業はもともと陸稲栽培が中心だったが、西欧諸国がインドシナ地域を植民地化した時代に、その影響で一部阿片栽培が始められた（Booth 1996：158-159；Kesmanee 1989：61；Renard 1997：309）⁵。1960年代以降になると、タイ政府や国際機関、諸外国によって山岳地帯に単一商用作

物栽培が持ち込まれ、資本主義経済の浸透や都市との交通・通信の激化によって、「山地民」にとって出稼ぎが大きな収入源となった。今日「山地民」とされる人々は、都市部を中心とした市場経済や国家政策と密接な関係の下にある (Sutthi 1994: 5; Vienne 1989: 38)。彼らのうちタイ市民権を与えられている人の割合は半数に満たないといわれ、所有権・選挙権のない居住権だけを持つ人やタイ政府から一切の権利を認められていない人も多い。こうした中で、教育・就職・医療・保険・福祉・政治参加などで権利の格差が生じている⁶。

これまでの「山地民」研究の主な流れとしては、1954年にリーチが『高地ビルマの政治体系』の中で、(1)山地に住む人々の社会は均質ではないこと、(2)山地民の人々が住む社会は閉じた体系ではなく、文化場の区別をこえてひろがる社会過程のメカニズムの中で変動しつつある社会体系であることを指摘した (Leach 1954: 281-285, 日本語訳は、関本照男訳本による)。この後1960年代後半からは、Kunstadter らが国家政策の中でタイの政府やエリートによって平野部に住むタイ人＝「平地民」より遅れた開発の対象として「山地民」という概念がつけられたという視点から、「山地民」研究を展開した (Kunstadter 1967)。また1980年代後半から1990年代初めには、John McKinnon らが、国家の中で周縁化された対象として「山地民」概念を捉え研究を展開した (McKinnon 1992)。

1990年代になると、タイの政府や知識人によって「上から」規定される、マイノリティとしての「山地民」概念が、「山地民」自身にはどのように捉えられているかを分析する視座が注目されるようになった。たとえば古家晴美は、カレン人やモン人のアイデンティティを分析し、カレン人やモン人自身の自己認識と他者規定は、国家的文脈における「山地民」と地域的文脈における「山の民」を区別しているという点を提示した (古家1993:40)。古家によれば、カレン人は、タイ政府に「山地民」としてカテゴライズされているが、カレン人自身は、モン人やリス人といった「山の民」を自分たちカレン人とは違う野蛮な人々として認識し、優越感を抱いているという (古家1993: 34, 40; Marlowe 1979: 169)。またモン人は、雇用関係、養子関係や通婚関係などで、カレン人に対して優越意識を持っているという (古家1993: 40)。また古家は、近年では国家という制度の中で政治経済の中心を占める「タイ人」に対し、構造的な弱者としての立場を共有する人たちが、タイ人など「外」の集団に相対するために、「山地民」というアイデンティティを政治的に利用していることも指摘している (古家1993: 42)。

本稿では、「山地民」という概念が、どのように「タイ人」の間に広まり、浸透していったかを分析するために、博物館展示の中で、(1)国家と「山地民」の関係がどのように伝えられているか、(2)「山地民」の中の民族区分がどのように示されているか、(3)「山地民」に関するイメージがどのように提示されているかを分析する。

具体的には、タイ北部にある山地民博物館の展示方法を分析する。タイ北部には、「チェンマイ山地民博物館」と「チェンライ山地民博物館」の2つの山地民博物館がある。チェンマイ山地民博物館は内務省の管轄下にある山地民研究所の直轄で管理されており、チェ

ンライ山地民博物館は半官半民の NGO である The Population and Community Development Association (以下 PDA) によって運営されている。さらにチェンライ県チェンセーン市にあるチェンセーン博物館には、「チェンライ県に住む諸民族」についての展示があり、その中にタイ北部のドミナント民族であるタイ・ユアン人などと一緒に「山地民」の展示がある。この他にも、1999年からは山地民研究の指導の下、観光客の訪れる山岳地帯の村々に観光客向けの「山地民博物館」がつくられている。しかし本稿では、山地民に関する展示がもっとも大きな3つの博物館、チェンマイ山地民博物館、チェンライ山地民博物館、チェンセーン博物館を分析の対象とする。

1 近代と「博物館」のまなざし

1.1 近代的な「まなざし」の提示の場としての博物館

既存の博物館研究には、まず1992年に吉見俊哉によって書かれた『博覧会の政治学』がある。吉見によれば、近代西欧社会は、17世紀以降に発展し18世紀に最盛期を迎える博物学が、大航海時代が「発見」した世界を、大航海時代とは異なる仕方でもなざし、分類し、配置していった(吉見1992:10)。近代西欧社会は、近代西欧的なまなざしを分類・配置する過程で、西洋を中心とした近代世界システムを作り上げ、西洋の経済的・政治的支配下にはいった非西洋の諸文化を「他者」として自分たちと区別していった。このとき近代西欧人の手で、アジアやアフリカ、南北アメリカについて、多くの精密な地図が作成され、諸民族が分類されていったのである(吉見1992:13)。

この近代西欧による非西欧社会の分類過程が持つもっとも大きな問題のひとつは、西欧は非西欧の民族を、空間性も時間性もない、均質的・非歴史的で没個人的な、変化のない閉じた社会のものとして、ガラスケースの中に閉じ込めてしまったことである(亀井2001:530; 清水1992:473; 全1999:279)。

博物館における展示とは、それ自体が博物館を管理する国家の集合記憶(collective memory)と密接に関連しており、博物館における展示自体、すでに政治性を帯びている(出利葉1999:47; 長谷川2000:34; 全1999:250)。これまで、博物館の概念は西洋における帝国主義および植民地主義の拡大という脈絡のもとで、国家権力とは無縁ではありえないとされてきた(全1999:247)。

1.2 博物館展示への批判的な動きと博物館の対応

こうした博物館と国家権力との結びつきについて、批判的に検証する動きが1980年代から盛んになった(亀井2001:520)。ここには1980年代以来、先住民の権利回復を求める動きが国際的に高まってきたという時代背景が影響している(永原2000:67)。たとえば、1985年にロンドンの人類学博物館(大英博物館民族誌部門)で開催された「アマゾンの隠れた人びと」展への抗議運動や、1992年夏にバルセロナで、アフリカ諸国の大使が当時ス

ペイン国内の自然史博物館に展示されていた「アフリカ人の剥製」を展示から外すことを要求して起こした運動等がある（亀井2001：519）。こうした一連の動きが、展示する権利の所在、展示する側と展示される側の関係性などの問題を前面に押し出した（亀井2001：519）。こうした動きを受けて、博物館や美術館での展示という表象行為そのものの政治性を問い、美術館・博物館をめぐる制度を問い直す動きに対応しようという動きも、1980年代後半からアメリカ、カナダ、オランダなど西欧諸国で始まった（亀井2001：526-527）。

1.3 言説を構成する仕組みとしての博物館機能の分析視点

博物館展示について問わなければならないのは、吉見がいうように、国家や企業がいかん帝主義や消費のイデオロギーを大衆に押しつけていったかということではなく、博覧会（や博物館）という場が、その言説一空間的な構成において、そこに集まった人々の世界にかかわる仕方をどう構造化していったのかということである（吉見1992：266カッコ内筆者）。本稿では、この視点から、タイにおいて「山地民」を政治的・経済的弱者とする言説がどのように創りあげられていったかを、博物館展示の分析から明らかにする。

タイ人自身による博物館に関する研究には、タイ政府による“phramahaaksatri thaikapkaanphiphittaphan”（『タイ国王と博物館事業』Khanakammakan amnuai kan cat ngan chalong siriratchasombat khrop hasip pi, 1998）がある。『タイ国王と博物館事業』は、タイにおける博物館の成立・歴史と、タイ国内にある主要な博物館の解説から成っている。しかし『タイ国王と博物館事業』は、支配的な立場にあるタイ人の側から博物館の果たす機能を強調したものであり、博物館の持つ政治性を分析してはいない。

2 「タイ人」対「山地民」の構図づくり

2.1 先住者としてのタイ系諸族、新入移民としての「山地民」イメージの創出

チェンマイ、チェンライ、チェンセーンそれぞれの山地民博物館（展示室）では、まず入って最初に目につく場所に、きまって2つの図が掲げられている。その1つは「山地民の民族別分布地図」であり、もう1つは「山地民の（国境）流入経路」である。この2つの図は、タイ北部およびタイ北部から近い地域（ラオス、ミャンマー、中国の一部）の地図が描かれている。ひとつの図には、アカ人、カレン人、モン人……といった民族ごとの分布状況が図示されている。この図によると、「山地民」は国境付近の山岳地帯に民族ごとに分布している。また「山地民の民族別分布地図」と並べて展示されている「山地民の国境流入経路」の図では、地図の上に、アカ人、カレン人、モン人……といった民族が、ビルマもしくは中国から流入してきたという経路が矢印で示されている。博物館にやってくる人々は、博物館に入って最初にこれらの図を目にすることによって、「山地民」＝「新入移民」というイメージを受けるのである。研究者の中には「山地民」とされる人々のうち半数はタイ人より前にその土地に住んでいたという人もあるが（Kesmanee1994：92）、博物

館の展示ではそれらの点はまったく読みとれない。

「山地民」＝新入移民というイメージが強調される理由には、1990年代後半のタイ政府の言動が関係している。1990年代後半、国連が「先住民族の10年」を宣言するなど先住民族の権利を主張する世論が国際的に高まりを見せた。このとき中国・インドをはじめとするアジア諸国の代表たちは、「アジアは歴史上常に人口の移動があり、南北アメリカやオーストラリアのような“先住民”は存在しない」と主張した。このころタイでも、タイ国内で活動していた欧米のNGOを中心に、「山地民」は先住民であるとして、「山地民」の人々が住む地域の森林資源への「山地民」自身の所有権を主張する動きが高まった。これを受けて、タイ政府は『「山地民」は先住民ではない』と主張したのである。山地民博物館の展示が「山地民」の移民性を強調するのはこうした背景を受けており、近代西欧的的な「先住権」の考え方を前提とした上で、タイ人の国であるタイに住む新入移民として、「山地民」が立場の弱いマイノリティであることを強調するような展示方法になっている⁷。

2.2 「タイ人」と「山地民」の間のヒエラルキーの創出

チェンマイ山地民博物館には、タイ政府が行ってきた「山地民への援助政策の歴史」についての展示がある。この展示は、『山地民への福祉援助』『農業技術援助』『公衆衛生』『職業訓練』『ケシ栽培撲滅』といった主題ごとに解説されている。

解説では、「山地民」を近年になってタイへ流入してきた新しい移民とし、「山地民」は国家安全保障への脅威である上に違法薬物であるアヘン・ヘロインの原料となる芥子の栽培を行う人々として違法性が強調されている。それに続いて（森林枯渇の原因とされる）移動焼畑耕作と（水源汚染の原因とされる）水源地帯への居住・耕作によって環境破壊を引き起こす存在として「山地民」の問題性が強調されている。そうした解説の後には、「山地民」の「兄」のような存在の「タイ人」が、「山地民」社会の開発のために、たいへんな努力と犠牲を払ってきたという解説がタイ語・英語の2言語で語られている⁸。この解説の特徴は、政治経済的な背景が強い「開発」行為を、山岳部への開発行為を諸外国による援助協力、山岳部開発移動チームのメンバーによる献身的な僻地開発への努力として感情的に美化・正統化して描いている点にある。

この解説文の中では、「兄」（タイ市民、仏教徒）としての「タイ人」と「弟」（タイ市民を目指す人々、まだ仏教のありがたさを理解できず、仏教徒になっていない人々）としての「山地民」の関係性が強調されている。ここでは「兄」と「弟」という先発／後進の関係を示すと同時に、年長者に敬意を払うタイという社会習慣の中では上下のヒエラルキーを表している。さらに、展示解説の中では、「兄」がいかに「弟」のために犠牲を払ってきたかという点を強調し、恩を施した存在と恩を受けた存在という関係性が描かれているのである。この展示は、「タイ人」と「まだタイ人にまだなれないでいる人々」との関係性をつくり出し、さらに「国民」と「国民になれない者」との区別を概念化しているといえることができる。

3 「山地民」内の民族分節化

チェンマイ山地民博物館の「山地民の生活」展示コーナーは、ショーケースが9つに区切られ、民族衣装と生活用品が民族ごとに展示されている。このように区切られた民族展示を見ていると、それを見る人々は、あたかも民族区分が所与のものとして存在し、境界のはっきりした分節的な民族の集団があるような錯覚を受ける。しかし実際には、はっきりと区切られた民族境界は近代西欧的なネイションが登場してからつくられた概念であり、タイの山岳地帯に住む人々の間には、民族の境界を超えた養子のやりとりや（吉野1995：66-67）民族を超えた通婚も行われており（速水2000：26-29）、民族間の差異は博物館で展示されているように明確なものではない。

では、なぜ博物館展示は、「山地民」をはっきりとした境界をもつ民族の集まりかのように見せようとするのだろうか。その理由は、「山地民」を分節化された少数民族の集まりと定義することによって、「山地民」がドミナントな集団である「タイ人」から見た近代西欧的な概念におけるマイノリティ、少数民族としての存在であることを浮き彫りにするためといえる。

では、博物館展示は、実態に忠実とは言えない内容を展示しているのに、なぜ説得力を持つことができるのだろうか。その理由のひとつは、言語学、人類学や歴史学といった社会科学が正統化され、それを根拠に民族分節が客観的事実として分析されたかのように説明することにある。それでは近代西欧社会科学は、どのように明確な民族区分や民族ごとの特徴を解説しているのだろうか。以下では、近代西欧的社会科学がどのように展示に説得力を与えているかを検討する。

3.1 言語学的な区分の利用

民族展示に添えられている解説は、「〇〇人の言語は、××語族に属する△△系の言語系統に属し」という言語学的な説明から始まる。このとき、解説は「中国・チベット語族」もしくは「オーストロネシアン語族」という、タイ以外の土地をイメージさせる語まで言語系統をさかのぼり、「中国・チベット語族」は“南下移民組”，「オーストロネシアン語族」は，“北上移民組”と述べられる。ここで注目すべきなのは、(1)“中国・チベット”もしくは“オーストロネシアン”というタイ以外の地域をイメージさせる語を用いることによって、「山地民」を移民として強調している点、(2)言語系統図のなかで“北上移民組”とされている人々は、タイ人が今の土地に南下してくるよりもずっと前にこの土地にやって来ていた、いわゆるタイの先住民であるという点は触れられていないという点である。

山岳地帯に住む人々は、一人がいくつもの言語を話すことも多く、また博物館の解説ではひとくくりに「〇〇語」と分類されている言語が、実は地域差が大きな言葉であることも多い。そうした状況を無視して「山地民」の言語を分析した解説は、解説を読む人に、「山地民」の話す言葉があたかも明確な分節をもった言語分類体系の中で存在しているかの

ように思わせる言語学的な区分が、民族分類の根拠のひとつだと思わせる効果をもっている。こうして、言語学的な解説はタイの山岳地帯に住む人々を近代西欧的な視点からみたときの、あるべき少数民族像に押し込めていくという働きを担っているといえる。

3.2 歴史学的な区分

山地民博物館の解説は、「山地民」は民族ごとに明確な住み分けをしているといい、「山地民」の下位区分としての民族ごとの特徴を、明確な類型図や系統図で示す。民族ごとの展示物につけられる解説にはその民族の移動の歴史が書かれており、それぞれの民族が、現在も生きる人としてではなく歴史の中の存在として示されている。たとえば民族ごとの解説に、「(この民族は) 歴史的には中国と深いつながりを持ち」「(この民族の人々は) もともとチベットに住んでいたが」という語が加えられることで、例えその民族の人々が数世代にわたってタイ領土内で生まれた人々であっても、起源がタイ以外の土地にあることが強調される。この記述は本来タイ人の国であるタイの領土に住むタイ人以外の人々、つまり本来そこにいるはずでない人々という印象を付与している。こうした語り方は、1961年にタイ政府と UNESCO によって初めて出版された「山地民」に関する研究報告書『タイ北部山地民』(Gordon : 1961) に始まり、それ以降の政府出版物で繰り返し用いられて来た「山地民は新入移民」という視点が前面に出ているといえる。

3.3 人類学的な区分

それぞれの民族についての解説では、「〇〇人は大家族制を好む」など人類学的な説明がされ、結婚式や衣装、男女の生業分担など「〇〇人の文化」について説明される。ここで注目すべき点は、解説の中で語られる「伝統的な文化・習慣」は「非常に中国的である」などその民族の出身国とされる外国との関連が強調されている点である。また、各民族のイメージが「アカ人は非常に精神性の高い生活を送っている」「リス人の女性は、いつも伝統的な華やかな衣装に身を包んでいる」など観光産業の文脈で定着しているイメージを強調するように提示される点も注目に値する。このように、ショーケースに飾られる民族ごとの衣装・住居の写真は、それぞれの民族には、それぞれの文化的な可視的特徴があるという近代西欧的な民族概念の前提としてのメッセージを含んでいるのである。

こうして、展示に添えられた解説を通じた「言語学的な分類」、「人類学的な特徴」、「産業・経済的な特徴」および分布図は、近代西欧的な社会科学の分類法、つまりアカデミズムというものを権威化し、民族境界や民族にかんするイメージを正統化する役割を果たしている。それでは、山地民博物館は、これらのものをどのように定義する役目を果たしているのだろうか。以下では、山地民博物館の展示が「山地民」にどのようなイメージを付与しようとしているかを見ていく。

4 「山地民」へのイメージ付与

4.1 「後進性」イメージの付与

チェンセーン博物館には、(チェンセーン市が属する)チェンライ県に住む諸民族についての展示コーナーがあり、モン人、アカ人、ヤオ人の3つの「山地民」とタイ系諸族の民族の展示がある。しかし、一緒に並べられているかに見えるこれらの展示でも、「山地民」に関する展示とタイ系諸族の展示との間には、展示物および展示方法に違いがある。

タイ系諸族の展示コーナーには、織物など手工芸品を中心とした展示物が飾られ、展示方法も実際に人物の顔が映っている写真は展示されていない。これに対して、「山地民」の展示コーナーでは、女性・子供を中心とした実在の人物の写真が並べられ、また展示物も工芸品ではなく、生活用品である農耕・調理器具や楽器などが展示されている。

ところが、タイ系諸族と分類される人々も「山地民」と分類される人々も、「山地民」コーナーに展示されているのと同じような生活用品を昔から使い、近年では大量生産されるプラスチック・ビニール製品を使うようになっている事情は変わらない。また「山地民」とされる人々もタイ系諸族と同じように手工芸品を生産している。それにも関わらず、「山地民」の展示では生活用品が展示され、タイ系諸族についての展示では手工芸品が展示されているという事実は、この博物館では、タイ系諸族を文化の保持者として展示し、また「山地民」を原始時代そのままの生活をしている生活水準の低い人々という印象を助長するような展示の仕方をしているのがわかる。

4.2 「野蛮性」イメージの付与

また、民族ごとの展示とは別に、主題別の展示も行われている。『阿片栽培について』のように阿片畑を写した写真、阿片吸引のための道具等が展示されており、このショーケースの一部には、首に銅線を巻きつけたパダウンの女性たちの写真が解説と共に展示されている。こうした展示物は、「山地民」の「野蛮性」を違法性と結びつけて語っているといえる。

4.3 「マイノリティ性」イメージの付与

山地民博物館における展示や解説には、「山地民」のマイノリティ性が強調されているといえる。たとえば、数字・分布図・解説、もしくは「山地民博物館」の存在そのものが提示する「山地民」の数の上での少数性の強調がそのひとつである。また「山地民のタイへの流入経路」図を中心に、解説が繰り返す「山地民」が新しい移民だという新参性の強調も、マイノリティであることを強調する役割を果たしている。また、チェンマイ山地民博物館3階の解説が提示する「山地民」と「タイ人」の関係に関するイメージのように、「山地民」は、タイ人および先進国の援助を「受ける」側のマイノリティとしての立場、「マイノリティ性」を強調する姿勢が見える。

おわりに

本稿では、国家によってつくられた「山地民」という概念が、どのように人々の間に広まり、浸透していくかを分析するために、博物館展示の分析を通じて、(1)国家と「山地民」の関係がどのように伝えられているか、(2)「山地民」の中の民族区分がどのように伝えられているか、(3)「山地民」に関するイメージがどのように提示されているという点を検討した。

ここからわかることは、ドミナントとしてのタイの政府やエリートは博物館展示を通じて市民権を持つことのできるタイ人と、まだタイの市民権を持つことのできない「山地民」とを、民族という境界を定義することで、正当化しようとしている点である。そしてここで特に注目されるのは、こうした区分と正当化の根拠には、人類学・言語学といった近代西欧の社会科学が利用されているということである。タイ人と「山地民」の区別には言語学的な根拠が用いられ、また「山地民」内の区分には言語学・歴史学・人類学の見地からの社会科学が根拠とされていた。また「山地民」という概念に、遅れた人々・野蛮な人々というイメージを付与するためには、歴史学・人類学的な理論が根拠とされている。

それでは、こうした社会科学が潜在的に持つ機能を、われわれはどのように認識し、どのように対応して行く方法があるだろうか。保苅はこの点に対し、エスノグラフィカルな歴史の併存の重要性という立場から、「クロス・カルチュラライジング・ヒストリー」を提示している⁹。必ずしも客観性を持ちえない「断片的」な歴史を否定するのではなく、ドミナント集団、各々のマイノリティが営む各々の「歴史」が根源的に多元的であることを認識し、さらにそこに相互のコミュニケーションの可能性を放棄しない態度が必要であるというのである。今後、「山地民」も含め、こうした「多元的歴史世界のなかのひとつ」としての「歴史」を掘り起こし、提示していく作業、およびそれに基づく認識に立った政治・経済的なあり方の追求が重要となっていくであろう。

注

1. ここでは、タイ語の Chao Khaw に相当する日本語の訳語として「山地民」を用い、タイ政府の行う定義を意味する。その出所としては、タイ政府の公共福祉局設立50周年記念展示会頒布物『山地民：生活と開発』(Tribal Research Institute : 1991)、山地民研究所30周年記念出版物『タイの山地民』(Tribal Research Institute : 1995)を参照した。
2. 冷戦下の1950年代前半、インドシナ地域では東西冷戦の緊張が高まっており、1953年3月ラオスに社会主義政権が誕生すると、アメリカは翌4月にタイ政府に協力する形で、タイーラオス国境の動きを監視する国境警備隊を東北タイに設立し、1955年にはタイ北部にまで拡大する。最初のタイ政府による「山地民」の対象化はここに始まる。
3. ただし「山地民」と非「山地民」(タイ系緒族など)との区別については、明確な「人種」、言語、生活習慣などによる区別が存在するわけではない。山岳地帯およびそれに近い平野部では、ひとつの村に「山地民」やタイ系諸族が混住し、それぞれに多言語話者として共生している例も珍しくない。ここで

- の「人口」とは、あくまでの政府の発表する数字のことを指している。
4. ただし、この分類項目の種類および分類の方法は、それぞれの統計の創られた主体と年代によって様々であり、その分類項目の種類・方法は恣意的なものである。詳しくは（石井2000）を参照。
 5. 帝国主義諸国が資本主義経済下で貿易品とするために阿片を持ち込むまでは、中国やインドシナ地域での阿片は医薬品か一部の特権階層にのみ許される嗜好品であり、大規模生産はされていなかった。しかし、ポルトガル・オランダ・スペイン・イギリスはアジアでの貿易の主導権争いの中でインド産阿片を大量に中国に持ち込み、持ち込み禁止を法的に求める清政府に対し、「自由貿易」を根拠に無視して流入を続けた。この結果、最低限、国外への銀流出だけでも食い止めるためにと、清政府は国内西南部の山岳地帯に住んでいた人々に阿片栽培を始めさせた。やがてこのアヘン栽培を始めた人々は、中国国内での混乱を避けて中国を脱出し、脱出した先のビルマでの戦争と混乱を避けてタイまで南下してきた人々は、阿片の栽培方法と流通に欠かせない雲南商人と共に移動していた。これが、今日の「山地民」の一部とされる人々であり、当初はタイ政府も阿片栽培奨励を行っていた。これが1958年に麻薬吸煙禁止例によって阿片が違法薬物とされてから、「違法薬物栽培者としての山地民」というイメージが創り出される根拠となった（Booth 1996 : 148-219 ; Kesmanee 1989 : 61-65 ; Renard 1997 : 309-314）。
 6. 「山地民」の中には、タイ市民権を持つことを証明する国民携帯証を持つ人（彼らは国内の移動およびタイ・パスポートの受給を申請することで海外へ出国することも自由である）と、高地民居住許可証を持つ人（居住県内の移動は自由であり、就労および就学、医療行為を受けることができるが、土地の所有権は認められず、居住県外への移動は法的に許されない）を持つ人がいる。また、以上どちらの証明書も受給を受けられない場合には、居住県外への移動が許されず、公立病院でも医療行為を拒否されることが法的正統性を持つ。一切の証明書を持たない人々は、家族の居住年数に関わらず常に「違法移民」として法的に処理される可能性を持っている。こうした移動の制限は、郡境・県境等に設けられた検問所でしばしば証明書提示を要求することによって実効性を持っている。また、タイでは学校の卒業資格取得、就職の際に国民携帯証の提示が必要とされる。このため、携帯証を持たない人々を好んで雇う中小企業も存在し、労働法の規定外の労働条件や長時間労働が行われることもある。
 7. 展示中の文章は、以下のとおりである。“There have always been many ethnic groups in Southeast Asia. Tibeto-Burman, Chinese, Shan and hilltribes have always migrated from north to south and settled in various Southeast Asian Countries. The majority of tribes in northern Thailand migrated within the last 100 years and came from China, Burma and Laos. They settled in mountainous areas of northern provinces at altitudes ranging from 800-2,000 meters above sea level. They led semi-nomadic lives. Their main occupation was shifting cultivation and some tribes grew opium as a cash crop. They had a low Socio-economic standard of living. They experienced political problems. Some were opium addicts, Environmental destruction was a problem as well.”
 8. 展示中の文章は、以下のとおりである。“Since the end of world war two there have been significant changes international relations and situation along the northern Thai border. There have come to play prominent roles in the politics of Thailand. The government and the populace began paying more attention to hilltribes who cause problems for the country. After the government outlawed opium growing on December 9, 1958, the Ministry of the interior took responsibility to implement policies to solve problems created by hilltribes. After through consideration, the government decided to establish the hilltribe Welfare Program.”
 9. 詳しくは、Hokari 2001 を参照。

参考文献

- Booth, Martin (1996). *Opium*. London: David Higham Associates. (=1998, 田中昌太郎訳『アヘン』中央公論社.)
- 出利葉浩司 (1999). 「民族学的情報伝達装置としての博物館——その研究の方向への視座」『北海道開拓記念館研究紀要』27 : 45-50.
- 古家晴美 (1993). 「『山地民』と『山の民』——北タイ『チャウ・カウ』研究への新たな視座を求めて」

- 『民族学研究』58, 1: 29–48.
- 長谷川賢二 (2000). 「公立博物館の展示と歴史学研究」『歴史評論』598: 24–35.
- 速水洋子 (2000). 「差異の交差するところ北タイ山地における民族間結婚」『地域研究論集』3, 2: 21–35.
- Hokari, Minoru (2001). *Cross-Culturalizing History: Journey to the Gurindji Way of Historical Practice*. Unpublished Ph.D. Thesis, The Australian National University.
- 石井香世子 (2000). 「タイにおける『山地民』概念の変遷」『法学政治学論及』46: 631–635.
- 亀井哲也 (2001). 「ンデベレの装飾と博物館」『国立民族学博物館研究報告 別冊』22: 181–205.
- Kesmanee, Chupinit (1989). The Poisoning Effect of a Lovers Triangles: Highlanders, Opium and Extension Crops, a Policy Overdue for Review. John McKinnon and Bernard Vienne eds., *Hill Tribes Today: Problems in Change*. Bangkok: White Lotus-Orstom.
- Kesmanee, Chupinit (1994). *The Impact of Tourism on Culture and Environment: A Case Study of the Mae Taeng Trekking Route in Chiang Mai*. Paper submitted to Office of National Culture Commission Ministry of Education. Khanakammakan amnuai kan cat ngan chalong siriratchasombat khrop hasip pi, 1998. *phramahakasat Thai kap kaanphithaphan*. krafic Fomaet.
- Kunstadter, P. eds. (1967). *Southeast-Asian Tribes: Minorities and Nations*. New Jersey: Princeton University Press.
- Kunstadter, P. Kunstadter and L. Sally (1983). Hmong (Meo) Highlander Merchants Lowland Thai Markets Spontaneous Development of Highland-lowland Interactions. *Mountain Research and Development*, 3, 4: 363–371.
- Leach, Edmund R. (1954). *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. Cambridge: Harvard University Press. (=1987, 関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂.)
- Marlowe, D. (1979). In the Mosaic: The Cognitive and Structural Aspect of Karen-Other relationships. Keyes, C. eds., *Ethnic Adaptation The Karen on the Thai Frontier with Burma*, 165–214.
- McKinnon, John (1992). Marginalisation in Thailand. *Pacific Viewpoint*, 33, 2: 119–192.
- 永原陽子 (2000). 「博物館のなかの先住民」『歴史評論』601: 60–69.
- Renard, D. Ronald (1997). The Making of a Problem: Narcotics in Mainland Southeast Asia, in McCaskill. Don and Kampe, Ken eds., *Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- 清水昭俊 (1992). 「永遠の未開文化と周辺民族——近代西欧人類学史点描」『国立民族学博物館研究報告』17, 3: 417–488.
- Sutthi, Chantaboon (1994). *Economic Development and Change: Highland of Thailand*. Paper prepared for the Seminar on Regional Cooperation for Quadrangle and Mekong Sustainable Development, 13–20 November 1994, Kunming China.
- Toyota, Mika (1998). Urban Migration and Cross-Border Networks: A Deconstruction of the Akha Identity in Chiang Mai. *Southeast Asian Studies*, 35, 4: 197–223.
- Tribal Research Institute (1991). *Hilltribes: Life and Development*. Tribal Research Institute.
- Tribal Research Institute (1995). *Hilltribes of Thailand*. Tribal Research Institute.
- Vienne, Bernard (1989). Facing Development in the Highlands: A Challenge for Thai Society. McKinnon, John and Vienne Bernard eds., *Hill Tribes Today: Problems in change*. Bangkok: White Lotus Orstom.
- 吉見俊哉 (1992). 『博覧会の政治学——まなざしの近代』中央公論社.
- 吉野晃 (1995). 「民族間関係とアイデンティティ——ミエン族の他民族養取」合田壽・大塚和夫編『民族誌の現在——近代・開発・他者』弘文堂, 53–69.
- Young, Gordon (1961). *The Hill Tribes of Northern Thailand: A Socio-Ethnological Report*. Report prepared under the agencies of the government of Thailand and with the cooperation of the United States.
- 全京秀 (1999). 「韓国博物館史における表象の政治人類学——植民地主義, 民族主義, そして展望としてのグローバリズム」『国立民族学博物館研究報告』24, 3: 247–290.